

# 理系研究者を対象としたワーク・ライフ・バランス(WLB)意識啓発 のためのeラーニング教材の提案

A Proposal of Development of e-Learning Material for the Scientist's Work-Life-Balance Awareness

大庭（小玉）小百合<sup>\*1,2</sup>, 喜多敏博<sup>\*1</sup>, 都竹茂樹<sup>\*1</sup>, 鈴木克明<sup>\*1</sup>

Sayuri (KODAMA) OBA, Toshihiro KITA, Shigeki TSUZUKU, Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院教授システム学専攻<sup>\*1</sup>, 千葉大学運営基盤機構男女共同参画推進部門<sup>\*2</sup>

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University<sup>\*1</sup>,

Chiba University Gender Equality Promotion Section<sup>\*2</sup>

＜あらまし＞本研究では、大学で働く理系研究者向けのWLB意識啓発研修プログラムの一部として、WLBの必要性を理解し、WLB実現に向けた行動を起こすためのきっかけとなるeラーニング教材を開発し、その効果について検証・分析することを目指している。本稿では、開発予定のeラーニング教材の概要及びeラーニング教材の元となる紙教材と今後の研究の計画について述べる。

＜キーワード＞ ワーク・ライフ・バランス 社会人教育 インストラクショナル・デザイン

## 1. はじめに

日本における働く人の「ワーク・ライフ・バランス (work-life balance : 以下、WLB)」、いわゆる「仕事と仕事以外の生活の両立」の実現は、共働きの増加や働く人の価値観の変化等から注目を集め、様々な取組が行われている。学術分野においても、大学における男女共同参画の一環として、WLB実現に関する制度の充実や環境整備が進められている。しかしその実現には、制度を利用しやすい職場風土や、制度に対する理解促進等、課題も少なくない。とりわけ研究者の場合、専門業務型裁量労働制が適用され、働き方は本人の裁量に任されているケースが多いものの、実際には、研究や学会等の諸活動の他に、講義やゼミ等の時間が固定化されている教育業務、入試業務やその他各種委員会等の出席等、多岐にわたる業務により、必ずしも業務の遂行方法や時間配分等に関して大幅な裁量が委ねられているわけではない(浜村 2015)。中でも、理系研究者の場合、実験や学生の実験指導等により、時間を拘束されることが多く、WLB実現が困難な状況である。

## 2. 研究の全体像

本研究は、理系研究者（男女）を対象に、WLB意識啓発のためのeラーニング教材を開発し、その効果を検証するために、次の3つを目的としている。

目的1：理系研究者向けのWLB意識啓発のためのeラーニング受講の効果について、以下の3つの観点から検証を行う。

- (1) 受講者が、WLBの実現に役立つ知識（学習課題：言語情報・知的技能）を身につけることができるようになったか。
- (2) 受講者が、自分自身の働き方・日常生活を振り返り、WLB実現に向けた行動をしようと考えるようになったか（学習課題：態度）。
- (3) 受講者にとって、開発したeラーニングの受講が、WLBが実現しやすい職場の改善につながるきっかけになりそうか。

目的2：開発したeラーニングの受講は、どのような理系研究者（研究分野や職位、役職、年代やライフスタイル（結婚しているかどうか、育児や介護負担があるかどうか等））にとって特に効果的かについて分析する。

目的3：先の1、2を元に、理系研究者にとって効果的なWLB意識啓発研修プログラムを設計し、提案する。

本稿では、開発予定のeラーニング教材の概要及びその元となる紙教材、今後の研究計画について紹介する。

## 3. eラーニング教材の概要

- (1) WLB意識啓発研修プログラム全体像

本研究では、先行研究を参考に、図1のStep1-3で構成されるWLB意識啓発研修プログラム(案)を設計した。この案におけるStep1にあたるeラーニングは、筆者が作成した2つの紙教材を元に、理系研究者向けに一部内容を改訂し、Moodleを使って作成する。

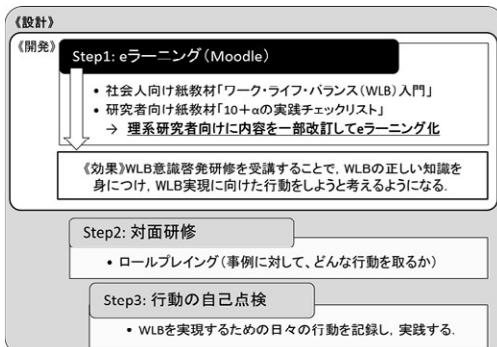


図1. WLB意識啓発研修プログラム全体像(案)

## (2) 開発済みの紙教材の概要

### [教材1] WLB入門

本教材は、2015年4月～8月にかけて筆者が受講した教授システム学専攻の開講科目「インストラクショナル・デザインⅠ」で、鈴木(2002)の教材設計マニュアルの教材作成の手順に基づいて作成した、社会人が独学で学べる紙教材(全46ページ)である。本教材は、1時間以内で学べる1回完結の自学自習教材として企画し、学習対象者(入口)、学習目標(出口)の設定(出入口の明確化)、教材の全体構造設計、各学習課題に応じた指導方略(独学を支援するための作戦)の作成を行い、ケラーのARCSモデルを元に、学習者の学習意欲を高めるための工夫等を取り入れ作成した。作成した教材は、学習対象者である社会人2名に教材を試してもらい(形成的評価)、その結果を反映して改訂を行った。

### [教材2] 10+αの実践チェックリスト

2015年10月～2016年3月にかけて筆者が受講した教授システム学専攻の開講科目「インストラクショナル・デザインⅡ」で、設計・開発した「研究者のためのWLB実践研修」で使用するために作成した紙教材(全2ページ)である。本教材は、内閣府 仕事と生活の調和推進室が2010年9月に発行した、WLBの実現に向けた仕事の進め方「10の実践」チェックリストを元に、筆者が研究者向けに改訂して作成した。

## 4. 今後の予定

本研究は、表1の手順で行う計画である。なお、本研究で開発するeラーニング教材の受講対象となる理系研究者に協力を得る際は、事前に文書で内容を提示して確認してもらい、これに同意した方のデータのみを使用する形とする。

表1. 今後の研究の手順

	内容	方法
開発 ↓	eラーニング教材開発	紙教材を元に、eラーニング教材をMoodleで作成する。
評価1 ↓	プレテスト	理系研究者数名に教材を試してもらい、試行した感想や、WLBに対する意見について聞き取りを行う。
改訂1 ↓	eラーニング教材改訂1	プレテストの結果反映して、教材を改訂する。
評価2 ↓	形成的評価1	ID専門家、内容領域専門家に作成した教材について評価してもらう。
改訂2 ↓	eラーニング教材改訂2	専門家の評価結果を反映して、教材を改訂する。
評価3 ↓	形成的評価2	修正した教材を理系研究者に実施し、事前・事後テストの分析結果から、受講による効果を確認する。
検証・分析		評価3の結果及び、受講者に回答してもらったアンケート結果を元に、教材の効果を検証・分析し、WLB意識啓発研修プログラムの全体像を設計する。

## 5. おわりに

時間制約の多い理系研究者にとって、場所や時間を選ばずに受講でき、WLB実現に効果のあるeラーニング教材を開発することは、多くの理系研究者に役立つツールになると考えられる。今後は開発を進め、教材の効果を検証・分析し、WLB意識啓発研修プログラムの全体像を設計する。

## 参考文献

- 鈴木 克明 (2002) 教材設計マニュアルー独学を支援するためにー, 北大路書房  
 内閣府 仕事と生活の調和推進室 (2010) ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた仕事の進め方「10の実践チェックリスト」  
<http://www.cao.go.jp/wlb/research/kouritsu/pdf/3point10jissen-2.pdf>  
 (参照日 2016.7.1)  
 浜村 彰 (2015) 若手の教育・研究者をめぐる労働法律上の問題, 日本労働研究雑誌, 660:16-26